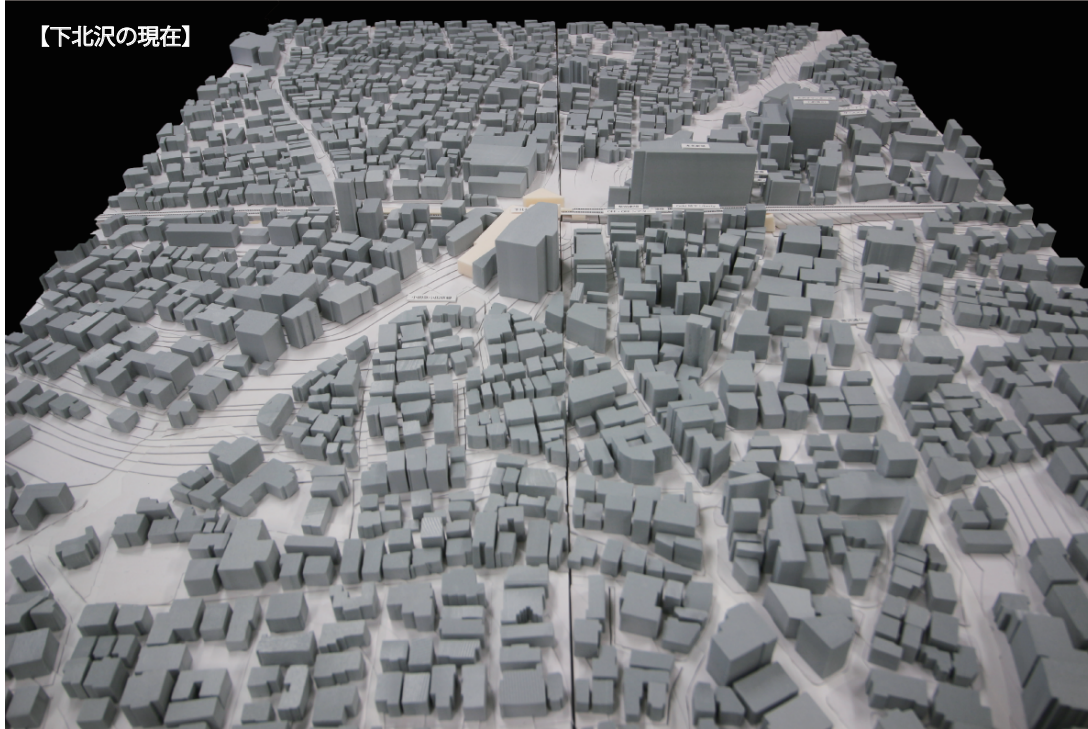


# 「都市の持つ劇場性を抽出した多様性を持った都市の構想」

～世田谷区下北沢を事例として～

【下北沢の現在】



【下北沢の未来】



## 【研究背景】

今日の都市空間では、地上と地下で様々な交通網が立体的に交錯し、経済性の追求を目的とした大規模再開発による建築物の高層化・巨大化によって、時間と距離の体感が失われ、都市・人々の暮らし・働き方は、均質化し、人間からの乖離は常に改まることなく昂進している。

空間・建築・都市が目指すべき平等（ユニバーサルデザイン）は均質な空間ではなく、「人間を中心」とした空間・建築・都市を提案することで、多くの人が各々の個性を発揮し、活動の自発性や多様性を担保できる都市こそが目指すべき都市像ではないだろうか。

本研究では都市が多様性を獲得する方法論を検討する上で、多様性・場所性に基づく魅力的な都市空間の設計手法の手がかりを劇場性という空間性の中に見出していきたい。

## 【研究目的】

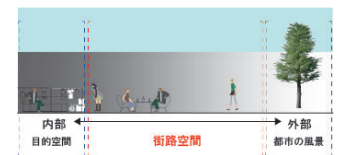
建築空間を検討すると、最終的に内部と外部という二つの空間に大きく分けられる。内部は建築としての使われ方、つまり図書館であれば閲覧スペースといったような目的空間である。一方、外部はその建築の周辺の外部環境として、つまり都市の風景と評価できるのではないかと。今日の都市に生み出されるほとんどの建築では内部と外部の関係は基本的に断絶し閉じている。都市に表情を与える、魅力的な広場や路地では、面する建築の内部と外部の間にもう一つのつなぎの空間が存在しているように感じる。こうしたつなぎ空間の存在は街の独自性を直接的に表現しているように感じられる。建築が都市に働きかける空間を魅力的なものにするための一つの方法論になり得るものであると考えられる。

都市に存在する曖昧な空間（路地や袋小路や広場など）要素をいかに建築に取り込み、内部と外部のつながり空間を魅力的な空間にできるか、本設計では、広場や袋小路のような外部空間と内部空間の水平的なつながりや広がり、斜面地の都市に見られるような外部空間と内部空間の断面的なつながりにおいて、見る・見られるの関係などに「劇場性」が存在すると考え、都市空間における建築空間構成の手法として提案することを目的とする。

調査地は、近年再開発がすすめられ都市の独自性が失われる可能性のある下北沢とする。



「Googleで『駅前再開発』と画像検索 均質な類似画像が多く現れる」



『建築における内部と外部の関係』



『下北沢の街路空間』

## 【日本における劇場性の検証】

演劇は人類のもつ芸術の中で、もっとも古いもののひとつと言われている。演劇は今でこそ芸術の類とされるが、その始まりはおそらく、宗教的であったり超自然的であったり、極めて厳粛で政治的意味合いの強いものだったのではないかと。演じる場も、その発生から今日に至る長い歴史の中で、社会的影響や演劇人・建築家などの想像力をもって変化を遂げて来たが、その始まりとしては祝祭性によるものであると言える。

日本の祭りの基本構造は、「神を人里に迎える→神の心を休め、人と交歓する→気持ちよまた帰ってもらう」の三部構成から成り立っているという。神は本来私たちの日常空間にいるという感覚ではなく、海の果てや山の奥、天空に住むと信じられ、そこから人の求めに応じて降りてきて、またそこに送り返されるといったように考えられてきた。そのため、神社は人々が住む集落にはなく、人が容易に近づけない場所にあった。そこから、神を迎え入れるために神輿や山車が作られ、人里の道を練り歩くようになったとされる。この「迎え送る」というプロセスをそのまま空間化しているという意味で、道こそが祭りの舞台であったと言える。

「通りが舞台化している様子「年中行事絵巻」平安後期」



「重要文化財「豊国祭礼図屏風」」



## 【劇場性の仮説】

劇などを上演するための専用施設が「劇場」と定義付けられる一方で、広義に演劇活動や祝祭が行われた空間は「劇場空間」として捉えることができる。劇場空間という枠組みから見ると、劇場は上演空間として固定化・専用化され、特有の型をもった劇場空間のひとつとして位置付けられる。具体的な形ではなく、記憶として人の心に残るのが演劇や音楽、劇場の中身である。そして、そうした行為が繰り返されていく過程で劇場やコンサートホールという特定の間が生まれ、建築的な意味を持つことになる。建築としての劇場空間の本質としては、「人間性の発露」を支援する場こそ「劇場性」を読み取ることができるのではないだろうか。また、既往研究と日本の祝祭性の変化から以下の4つが劇場性を創出する要素として仮定する。

- ・仮設的な要素・価値の転換を生む要素
- ・出来事を引き起こす要素・見る、見られるの関係を演出する要素

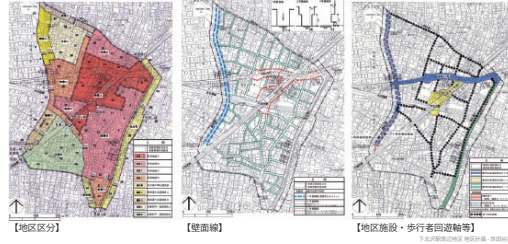
## 【下北沢周辺再開発の概要】

下北沢駅周辺の地域は、小田急線の連続立体交差事業とそれに伴う都市計画道路補助 54 号線の事業化によって揺られている。「補助 54 号線」とは、1946 年の戦後復興計画の中で都市計画決定された道路で、その後約 60 年間実現されずにきていたが、2003 年に小田急線下北沢駅が地下化されることに伴い、再度この計画が浮上した。この地域には大きく4つの事業計画が存在する。

1. 補助 54 号線
2. 区画街路 10 号線



## 3. 地区計画



## 4 下北沢地区トポグラフィ計画



## 【再開発の問題点】

世田谷区は「道路や公園など都市基盤の整備が不十分。歩行者の安全や快適な買いもの空間、防災上の課題を抱えている」という再開発の目的が挙げられているが、「開発が進み地区計画が策定されると、新築されたビルには高い賃料を払える大手チェーン店だらけになる。それでは街の個性は消えてしまう」と、下北沢らしさの損失が危惧されていた。下北沢の多くの住民や商店が大型ビルの建設に反対していることが分かる。また、「街並みが壊れる」「街の魅力が破壊される」「個性的で魅力のある小さな店舗がなくなる」といった反対理由が地域住民、商業者両方において意見が出されるといことは、それまで小規模店舗が集積する下北沢の特徴が失われることに不安を感じる地域関係者が多いことを示している。

## 【下北沢における劇場性の分析】

建築はその場所に建てられると、内部と外部、室内と道路に分けられて考えられることが多く述べてきた。しかし、そのような流れとは異なり、室内（私的空間）と道路（公共空間）でのそれぞれの活動が緩やかに繋ぐ空間が下北沢には存在する。そこでは誰もが自由に行き来し、道路自体が「表現の場」になっている。そこでは、商品が単なるディスプレイではなく、買い物、飲食、休憩などその店を利用する人の行為が表出しており、賑わいを演出している。さらに、店員・お客・歩行者が（私的空間）と（公共空間）の境界に集まり、その場を形成している。このような現象を生み出している場所が「劇場性」を持った空間ではないだろうか。



「下北沢の内部と外部の空間境界の様子」



「下北沢らしさを演出する空間要素の分類」

実際に下北沢の街を歩いて内部と外部の空間境界に人々の行為を演出する要素を大きく6種類に分類する事が出来た。これをもとに、「劇場性」を生み出している空間要素をより具体的に明らかにしていく。

これらの要素は下北沢の細く入り組んだ街路を魅力的なものとしており、同じような要素が多く集積することで下北沢らしさとしてイメージづけられている。建築と道の間「表現の場」を演出しているこれらの要素を分析し「劇場性」を導き出していく。

## 【下北沢の叉路空間】

下北沢の整理されていない路地の交差点は、それぞれ先行や起伏が異なり、それぞれの道ごとに繋がるだろうといった期待感や好奇心を掻き立てる奥性を感じる。

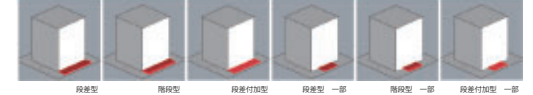
「下北沢の叉路分類」



## 【下北沢のテラス空間】

下北沢は、車の交通があるゆっくつかつ少ないため魅力的なテラス空間が数多く存在している。また、これらのテラス空間は、飲食や休憩のための空間ではなく、昼間の間に仮設的に店舗から商品などを並べる空間にもなっており、それらが下北沢の都市のイメージのひとつとなっている。

「下北沢のテラス空間分類」



## 【ファサードの劇場性】

内部と外部の空間境界であるお店のファサードには透過性の高いガラスが使われることが多いが、その可視範囲によって内外のつながりの度合いは変わってくる。さらに、開口の大きさによっても変化があり、特に出入口の大きさは、公共空間から私的空間への誘いの度合いは操作することができる。

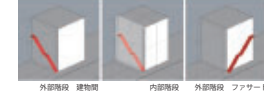
「ファサード開口分類」



## 【階段の持つ劇場性】

階ごとの異なるテナント同士が共用の通路として利用している階段は、街路から連続する店内へのつながりの空間である。この空間では、店舗の商品や装飾が表出しており、それらを街路からも視認できるため、宣伝効果や賑わいの空間を生み出し、人々の様々な行為が演出される要素となっている。

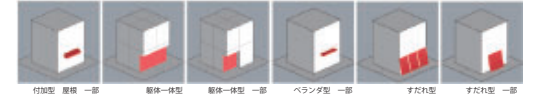
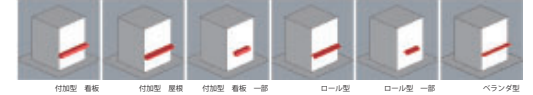
「階段の接続パターン分類」



## 【軒下空間の劇場性】

屋根としての役割を持つ軒や仮設的に取り付けられた折りたたみ式の軒、看板の役割を持つ軒など多種多様な軒下空間を創出する工夫があり、それらは季節や時間帯、季節によって変化するものもあるため、都市の風景を変化させたといった劇場性を持っていると考えられる。

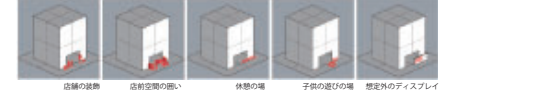
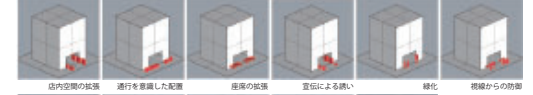
「下北沢の軒下空間分類」



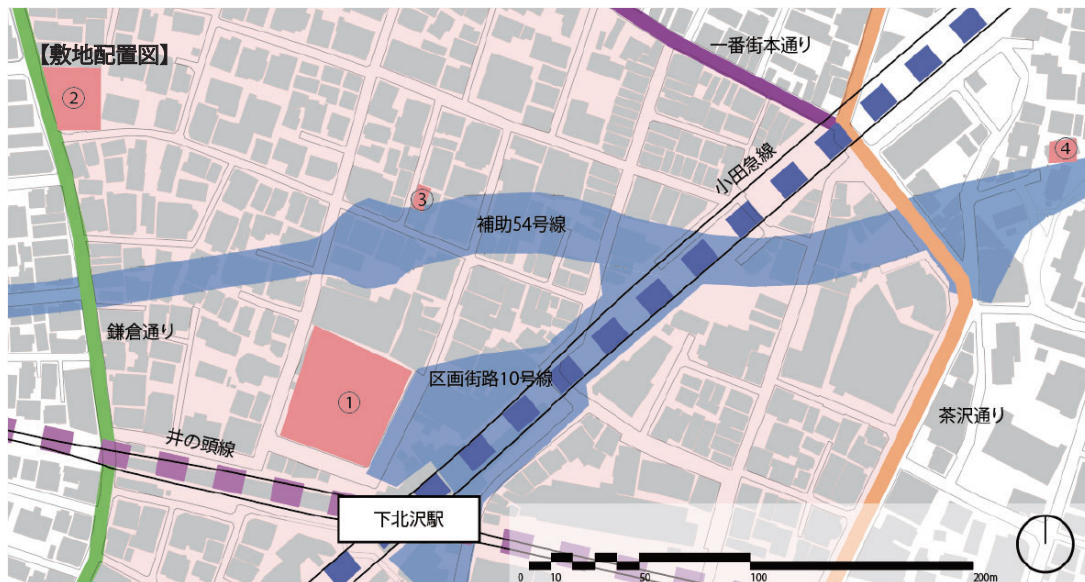
## 【表出物の配置形式の劇場性】

下北沢の店前空間には、商品や家具など多種多様なものが配置されている。配置形式のものにも演出的要素があり、お客に対して購入、読み取り、滞在を促す演出的要素がある。それらは、通行人から行為を想像できるように配置され、利用している人々の様子を見とるその場は空間化されており、劇場性を持っていると思える。

「配置パターンの分類」



下北沢では、建築と街路という内部と外部の空間の間に人々の行為を誘発し「人間性の発露」するつながりの空間が存在することが分かった。それらは、今日の下北沢の都市のイメージとして街の魅力になっている部分から読み取る事が出来、その魅力を創出する空間からは「仮設的な要素」「価値の転換を生む要素」「出来事を引き起こす要素」が見える、見られるの関係を演出する要素を見出す事が出来た。これらは「劇場性」を構成する要素であり、都市の魅力は「劇場性」を生じさせることによって維持され、形作られていくのではないだろうか。



②内外に個性があふれ出す個性と繋がり方を選べる集合住宅

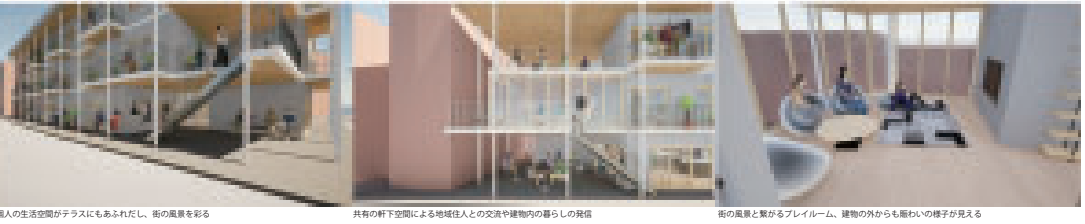


一定のリズムを持っている従来の賃貸住宅と比較し、動的で人々の視線や動きが交差することを目的とした。住居空間が持つそれぞれの機能を分散し、機能ごとに借りることができるシステム。利用者のニーズに深く応えることができ、またそれぞれの棟をその人にとっての要素として考え、独立的なストーリーを展開できる。それらが時には融合し、時には反発する。そういった「人間らしさ」というものも、本住宅で味わうことができる。形の異なる各住居は、人々の視線を交差させ、多くの劇場性を生みやすくなる。その劇場性が活発化することで、人々の中に文化やルールが生まれ、また新たなストーリーが展開される。起承転結のある1つの演劇場のような場所がこの賃貸住宅である。

①シモキタらしさを取り入れた体験に出会う商業施設



ハブとしての役割を持った下北沢の街のアイデンティティを外へと発信していく建築を設計する。既存の多くのデパートは売ることだけに主眼を置いている。ものを陳列することで客がモノを比較できるというメリットがあるが、ここではモノにかかわるあらゆるコトが体験できるようにする。それら体験を直接売る、あるいは蓄積された体験自体がモノの販売に繋がり、それが街全体に広がることを目的とする。そのために駅前の大規模な建物が建てられる可能性がある敷地を選択する。傾斜地に機能を分けボリュームを立ち上げる。街路のようなスロープを巻き付け様々な意図しない出会いや体験が行われる施設となる。



③路地にあふれ出す個性と立体路地でつながる家族の輪のある店舗併用住宅



下北沢を分断する補助54号線沿いの敷地を選び、敷地の中へ下北沢の奥へ誘う路地を通す。さらに外部階段を巻き付けることで段階的なつながりを生むことができる。家族といえどもそれぞれの個人は自分だけの趣味や文化を持っている。個人の文化を尊重しながら生きていくことが、現代社会の理想的な家族の在り方になるのではないかと。現代の住宅は社会から切り離され、さらに住宅の中では家族との関係を分断するような個室が置かれている。個室という個人の文化の集合を外に開くことで社会と繋がり、地面から離れた大きなワンルームは家族をより親密にする。

④おらかな斜面で移ろう生活があふれ出す戸建住宅

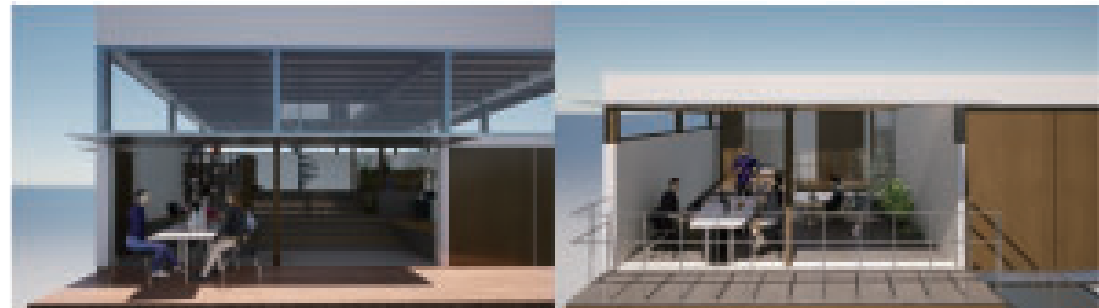


下北沢を特徴づける地形の傾斜を利用する。斜面に沿って階段状にスラブを挿入しそこが居住者の生活の中心になる。ボックスをかぶせることで外部の地形と連続した内部空間となる。大きな戸の開閉によって内部と外部は連続し、人々の活動があふれ出す。地形を利用した階段を中心に空間を構成され、階段はそのおおらかさによって単なる移動空間だけでなく、人や物の居場所となり、様々な生活があふれ出す生活の中心となる。空間の仕切りはカーテンと段差によるもので、仮設的なものであり、様々な使われ方によって大きく空間のイメージを変えるものとなる。



立体路地である外部階段を軒下空間として利用しあふれた生活や商品

敷地内を通した路地が敷地内、下北沢の奥への誘いになる



路地に解放されたリビング、街と繋がり街の一部として利用される

あけ放たれたテラス、開放的にも内密的にも利用できる二面性を持った空間



リビングから見た街の風景と繋がるテラス

段々のリビングによってさまざまな人や物の居場所が作られ視線にも変化を与える

都市との関係を感じながらも段々によって緩やかに繋がれたリビングで家族とつながる



同じ時間や季節でも、心地よい異なる居場所を与えるテラスを覆うルーバー

地形を利用した階段により緩やかにつながる個人の時間

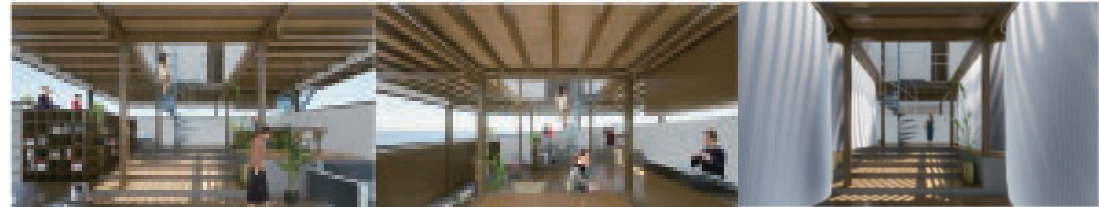
地形をお利用した階段により緩やかにつながるリビング、ダイニング、キッチン



個室空間をつなぐ立体路地はお互いの生活を緩やかに繋ぐ

敷地内を通された路地と立体路地、あふれた個性が通の風景に変化を与える

建物外にあふれ出した家具や商品によって、店舗空間が拡大し街の風景となる



階段を中心に展開される、様々な生活

互いの生活を観察できる視線の拡げ

空間の仕切り方によって変わる風景